

ひょうご農林水産業 体験学習実践事例集



平成 25 年 2 月

農 林 水 産 業 副 読 本 作 成 委 員 会

構成 兵庫県・兵庫県教育委員会・兵庫県小学校教育研究会社会科部会
兵庫県農業協同組合中央会・兵庫県森林組合連合会・兵庫県漁業協同組合連合会

ひょうご農林水産業体験学習実践事例集の作成にあたって

わが国の農林水産業は、国民の生活に不可欠な食料や住宅資材等を供給し、地域経済を支える非常に重要な産業です。また、国土や自然環境の保全、水資源のかん養、洪水の防止などの多面的な機能も有しており、これらは、地域の住民だけでなく、国民全体が享受し得るものです。

しかし、貿易自由化に伴う農林水産物の輸入増大などによって国内生産は縮小し、農林水産業の経営は厳しい状況が続いています。農山漁村においては、少子・高齢化、過疎化、担い手不足等の様々な課題が急速に顕在化しており、活力の低下や森林・農地の保全が危惧される状況もみられます。

将来にわたって農林水産業、農山漁村が持続していくためには、農林水産業の役割について国民全体が認識し、農林水産業が抱える問題について一緒に考えていくことが重要となっています。

一方で、子どもたちの農林水産業・農山漁村体験は、農林水産業への理解や関心を深めさせるだけでなく、食や食生活にも興味をもたせたり、様々な人たちと出会い、交流していなかで人間関係を構築する力を身につけ、人間性を向上させたりするのにも大きな効果を及ぼす取組として期待されています。

兵庫県では、全国に先駆け、小学生を対象とした「環境体験事業」、「自然学校」、中学生を対象とした「トライやる・ウィーク」など、児童生徒の発達段階に応じた体験教育を実施しているところです。このような体験学習のなかで農林水産業・農山漁村がもつ教育的機能を活用した取組も実施されています。

この冊子は、平成 24 年度に県内において実施された農林水産業体験学習のなかから、特色ある事例をとりまとめたものです。

今後、この事例集を参考に、多くの学校において農林水産業体験学習が実践され、子どもたちの豊かな心がはぐくまれ、農林水産業への理解が深まることを期待します。

兵庫県小学校教育研究会社会科部会会長
神戸市立渦が森小学校校長 飯塚 博

〔目次〕

【農林水産体験学習実践事例】

| | |
|-----------------------------------|----|
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（神戸市立西山小学校） | 1 |
| ○近隣の畑での枝豆の栽培体験・野菜畑の見学（神戸市立出合小学校） | 3 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（尼崎市立武庫の里小学校） | 6 |
| ○校内農園での米づくり体験（西宮市立平木小学校） | 8 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（三田市立つつじが丘小学校） | 10 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（猪名川町立大島小学校） | 13 |
| ○ヒラメの稚魚放流・漁港やノリ加工場の見学（高砂市立伊保南小学校） | 15 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（稲美町立加古小学校） | 17 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（加西市立下里小学校） | 20 |
| ○校内農園でのもち米づくり体験（加東市立社小学校） | 22 |
| ○近隣の田んぼでの米づくり体験（姫路市立糸引小学校） | 24 |
| ○近隣の田畑での米とサツマイモの栽培体験（市川町立鶴居小学校） | 27 |
| ○牡蠣養殖の作業体験・牡蠣加工場の見学（相生市立相生小学校） | 29 |
| ○いちじく畑の見学・いちじくジャムづくり体験（太子町立太田小学校） | 31 |
| ○近隣の田畑での米とピーマンの栽培体験（豊岡市立資母小学校） | 33 |
| ○シーカヤックでの海の観察・ワカメの収穫体験（香美町立柴山小学校） | 35 |
| ○近隣の畑での黒大豆の栽培体験（篠山市立城北小学校） | 37 |
| ○近隣の畑での大豆の栽培体験・味噌づくり体験（丹波市立竹田小学校） | 39 |
| ○アサリ養殖や釣り漁など地域の漁業体験（南あわじ市立沼島小学校） | 41 |
| ○近隣の畑でのキクの栽培体験（淡路市立佐野小学校） | 43 |
| 【農林水産体験学習の企画・実施にあたって】 | 45 |

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：神戸市立西山小学校

学 年：小学3年生

どうやって育てるの？わたしたちの主食「米」

学習のねらい

- ・ 米づくりを通じて、食べ物に対する興味をもち、農業に携わる方の苦勞を知る。
- ・ 農作業をすることで、農家の苦勞や努力を知り、農作物を大切にする気持ちを育み、自分たちの食生活を見つめ直す。
- ・ 地域の方々と共に作業することで、地域との連携を図る。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「田畑で働く人々の仕事」からつながる。
- ・ 5年生の「米作りのさかんな地域」へつなげる。

活動の展開（18 時間）

事前学習（2 時間）

- ・ 校区の田んぼを観察してみよう。
- ・ 稲はどのように生長し、田植えはどのようにするのか調べよう。

体験活動（12 時間）

- 稲の生長について、農家の米作りの工夫や努力を教えてもらおう。
 - ・ 田植えをしてみよう。（3時間）
 - 稲の生長を調べて、草引きについて教えてもらおう。
 - ・ 草引きをしてみよう。（3時間）
 - 稲の生長を調べて、稲刈りについて教えてもらおう。
 - ・ 稲刈り、いなきかけ、肥料撒きをしてみよう。（3時間）
 - 餅つきについて教えてもらおう。
 - ・ 餅つきをしてみよう。（3時間）
 - ・ 自分たちで育てたもち米をお餅にして食べてみよう。
- ※ 活動場所：地域にある田園スポーツセンター内の田んぼ2枚



田植えの様子（6月）



収穫作業の様子（11月）

（いなき…稲などの穀物や野菜を刈り取った後に束ねて天日に干せるように木材や竹などで柱を作り地上から干す材料が地面につかない程度の高さに横木を何本か掛けて作ったもの）

事後学習（4 時間）

- ・ 苗を植えてからお米ができるまでの過程や、運搬、販売過程について発表してみよう。
- ・ お世話になったボランティアさんや保護者の方へお礼の手紙を送ろう。
(震災にあわれた宮城県気仙沼市の方にもち米を贈ろう。)

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ ボランティアの方の説明を聞き、できるだけ体験重視の活動にするため、田んぼの広さを大きくしてもらった。
- ・ 収穫して食べるだけでなく、震災復興で繋がりのある宮城県気仙沼市の方へ、今年も収穫したもち米を贈ることにした。

【配慮事項】

- ・ 田植えや草引き、収穫作業の際には、できるだけ多くの保護者の協力を得て、児童に付き添っていただき、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- ・ NPO法人北神戸田園ボランティアネット → 田植え、草引き、収穫作業の補助、餅つき、講話、日頃の田んぼの整備
- ・ 保護者 → 田植え、草引き、収穫作業の補助、餅つきの補助

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 広い田んぼだったので児童が十分活動することができた。
- ・ 作業をする中で自然の恵みの大切さを理解し、自分たちの地域を改めて見つめ直すことができた。(有機農法で育てるため、水田の周りは小動物が共存している。食の安全や環境問題についても考えられることができた。)
- ・ 私たちが「地産地消」していくことが、「わが国の農業や農家を守ることに繋がる」ということを知ることができた。
- ・ 給食などの残食が減り、食べ物大切さを認識するようになった。
- ・ 保護者や地域の方々なども関心を持ち、田園スポーツセンターのイベントなどに参加していくようになった。

【課題】

- ・ 田植え、草引き、収穫、餅つきという過程でかなり充実した活動であった。稲の生長など時々観察していけば良かったが、なかなか授業時間の確保ができなかった。
- ・ 稲作だけでなく、近くに山もあるので虫や小動物などの観察もしながら、年間計画を整理すると、もっと有効に活動できると思う。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 3学期は食育の学習があるので、他の野菜や果物などにも興味をもたせ、自分たちの国の食料事情についても調べてみたい。
- ・ 子どもたちにとって有効な活動をしているNPOに対して、毎年3年生だけが「米作り」で関わっているだけなので、他の学年も活用できる年間計画を立てていきたい。
- ・ 地域の方々を巻き込んでいながら、学校、家庭、地域ぐるみで活動していけるようにしていきたい。

近隣の畑での枝豆の栽培体験・野菜畑の見学

実践校名：神戸市立出合小学校
学 年：小学3年生

「出合はかせ」になろう！

学習のねらい

本校区には、農業を営む方が少なくない。しかし、どのような野菜が作られ、どのように育っているのか知らない児童も多い。そこで、実際に野菜を育て、育つ様子を調べるとともに、農家の人の苦勞や工夫を知り、恵みのありがたさを感じさせたい。

社会科学習とのかかわり

- ・ 私たちの町・新発見（3年生）
- ・ 田畑ではたらく人びとの仕事（3年生）

活動の展開（28 時間）

事前学習（8 時間）

- ・ 校区内の様子を調べるにより、地域ごとに農地・住宅地に分かれていることを知ろう。
- ・ 校区内の農地では、主に枝豆・大根・水菜などの野菜が生産されていることを知ろう。



体験活動（12 時間）

- ・ 枝豆の種まきをしよう。
- ・ 枝豆の苗周辺の雑草とりをしよう。
- ・ 枝豆の収穫をしよう。
- ・ 大根の苗周辺の雑草とりをしよう。
- ・ ビニルハウス畑（水菜・小松菜・菊菜）の見学・観察をして野菜づくりの工夫や努力を教えてもらおう。
- ・ 大根の収穫をしよう。

活動場所：神戸市西区玉津町出合

校区内生産者の畑 面積約 0.1 a



事後学習（8 時間）

- ・ 枝豆、大根、水菜について育つ過程をまとめ、運搬や販売過程や調理方法などを調べて発表しよう。
- ・ お世話になった地域の方にお礼の手紙を送ろう。



体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 現場での説明を聞きやすい場所の設定。
- ・ 教えてくださる農家の方との日程調整。
- ・ 教師と農家の方との事前打ち合わせ。

【配慮事項】

- ・ 暑い時期の熱中症防止のため、児童の水筒以外に、別にお茶を用意した。
- ・ 畑が道路沿いにあるため、担任以外の教師も付き添って、事故の防止に努めた。

体験活動の支援体制

- ・ 校区内生産者 畑の提供
枝豆・大根の栽培（種まきから収穫まで）の補助・指導・説明
ビニルハウス（水菜・小松菜・菊菜）の見学・説明・講話

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 自分たちの住んでいる地域には、たくさんの畑があり、季節ごとにいろいろな野菜が育てられていることを知り、関心をもつことができた。
- ・ 地域の畑では、自分たちが収穫した枝豆や大根が育てられていることを知るとともに、その育て方や苦労、工夫を知ることができた。
- ・ 枝豆、大根、水菜について、その生産や収穫、販売過程、また調理方法を知ることによって、嫌いな野菜でも、頑張っ食べようという気持ちが生まれた。
- ・ 地域の方に対して、感謝する気持ちが生まれ、校区内の田畑、用水路、作物を大切にしようとする思いが深まった。

【参考：体験前後のアンケート結果】

| 質問内容 | 体験前 | 体験後 |
|-----------------|-------|-------|
| 野菜作りの苦労が分かった | 6.3% | 93.9% |
| 嫌いな野菜も食べるようになった | 31.3% | 87.5% |
| 田や畑に関心がある | 3.1% | 96.9% |

【課題】

- ・ 3年生100名弱の児童が、校区内とはいえ、畑まで頻繁に行くことは難しく、種まきの後はほとんど、地域の方任せになってしまった。もっと自分たちが育てたという意識をもたせるために時間の確保が必要である。
- ・ 教師と地域支援者が相談し、計画して実施しているので、児童にとっては受け身的な活動になっており、どの部分で児童の思いや意見を取り入れるかが課題である。

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名: 尼崎市立武庫の里小学校

学 年: 小学3年生

田植えの経験から、農業に対する理解を深める

学習のねらい

- ・ 実際に田植えを体験し農家の人の苦労や努力を知ることにより、農作物を大切にする気持ちを育む。
- ・ 身近な農作物である米づくりを通じて、地域の農業について、関心をもち、理解を深める。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「地域の水田」からつながる。
- ・ 5年生の「米作りのさかんな地域」へつながる。

活動の展開 (18 時間)

事前学習 (3 時間)

- ・ 校区の田んぼを観察してみよう。
- ・ 米のできかたを調べよう。

体験活動 (10 時間)

- ・ 田植えをしよう。
- ・ 水稻の生長の様子を観察しよう。
- ・ 稲刈りをしよう。
- ・ おにぎりパーティーをしよう。
- ・ ポン菓子づくりをしよう。
- ・ しめ縄づくりをしよう。

活動場所: 校外にある地域協力者の田んぼ

事後学習 (5 時間)

- ・ 苗を植えてからお米ができるまでをまとめて発表しよう。
- ・ お世話になった農家さんへお礼の手紙を書こう。



田植えの様子 (6月)



稲刈りの様子 (10月)

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 農家の方や J A の方に教えてもらい田植えや稲刈りをした。
- ・ 老人会、J A、保護者の方にきてもらい、しめ縄づくりをした。

【配慮事項】

- ・ 田植えや稲刈りの際にはできるだけ多くの P T A の協力を得て、児童に付き添って頂き、事故の防止に努めた。

体験活動の支援体制

- ・ P T A、地元生産者 → P T A：田植え、稲刈りの補助
地元生産者：田んぼの提供、作業の指導、講話
- ・ J A兵庫六甲 武庫支店 → 作業の指導、ポン菓子作りの支援
- ・ 老人会 → しめ縄づくりの指導

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 一連の体験により、児童は米づくりの苦労や喜びを知り、食べ物大切さを実感した。給食を残さず食べようという意識が高まった。
- ・ おにぎりづくりでは、一粒一粒の米を大切に味わった。
- ・ 昔から伝わる文化に興味をもつことができた。
- ・ 地域の方へ、感謝の心をもつことができた。

【課題】

- ・ 2学期は校内の行事（体育大会・音楽会）があり、稲刈りやしめ縄づくりなど行事が重なり、少しあわただしかった。
- ・ 田植えから収穫までの過程は生産者任せであるため、「自分たちで育てた」という実感は薄く、途中の段階の関わりを考え、実行する計画も必要であった。
- ・ 関係機関、関係者の支援体制の持続ができるかどうかは課題である。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 体験が中心であったが、米づくりを通して何を教えるのか、教育課程の中で考えていきたい。
- ・ 学校・家庭・地域で、食育の面でさらに良い取り組みを連携して取り組んでいきたい。具体的には、学校公開（オープンスクール）や参観日で、親子でおにぎりづくりや地域の方としめ縄づくりをする等、活動の場を広げていきたい。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 「お米がこんなふうに見える事を知って、ごはんを残さず食べようと思った。」と食に対する感謝の声が多くあった。
- ・ 「自分たちで作ったお米でできた、ポン菓子は最高においしかったよ。全校のみんなで食べるぐらいたくさんできて、びっくりしたよ。」と言った声があがった。
- ・ 校区にある田んぼを観察しようという意識が育った。

校内農園での米づくり体験

実践校名：西宮市立平木小学校

学 年：小学5年生

総合的な学習の時間「平木米を作ろう」

学習のねらい

- ・ 自分たちの命を支える米を作る喜びを味わい、自然の恵みのすばらしさに気づく。
- ・ 米を作る仕事の苦労や工夫を知り、自分たちの食生活が農家の人々の努力によって支えられていることに気づく。

社会科学習とのかかわり

- ・ 5年生の「米づくりのさかんな地域」とのつながり

活動の展開（16時間）

事前学習（2時間）

- ・ 日本の農業について
地域の農家の方から米の自給率や地産地消のお話を聞いた。

体験活動（12時間）

- ・ 苗を育てよう。
毎日、水をかかさないように、教室で種籾の生長の様子を観察した。
- ・ 田植えの準備をしよう。
スコップで田んぼの石を取り除き、土を軟らかくして、草を抜いたり、石を拾ったりした。
- ・ 田植えをしよう。
地域の農家の方や、JAの職員の方にも手伝ってもらいながら苗を植えた。途中からは田植機で植えてもらい、昔の作業と今の作業の違いを見せてもらった。
- ・ 稲の生長の様子を観察しよう。
毎週1回自分の決めた苗の観察を記録していった。
- ・ 稲刈りをしよう。
鎌を使って一人ずつ稲を刈った後、コンバインで刈り取った。
- ・ 収穫感謝祭をしよう。
米作りでお世話になった方々を招待して、感謝祭を行った。平木米でおにぎりを作り、保護者の方が作って下さった豚汁を一緒に頂いた。
- ・ 縄ない、わら草履作りをしよう
農家の方に教わりながら、縄をなったり、わら草履を作ったりした。自然の恵みを最後まで使い切る昔の人々の



農家の方の話を聞く



田植え体験の様子



収穫体験の様子



収穫感謝祭の様子

暮らしの知恵を学んだ。

※ 活動場所：教室、中庭の田んぼ

事後学習（2時間）

- ・ 米作りの体験をまとめよう。
- ・ 米作りを通じて学んだことや、自分の食生活について考えたことなどをまとめた。

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 体験した後に、子どもたちの疑問や質問に答えるため、時間を取り農家の方とのやりとりできる場を設けた。
- ・ 実際に農業機械に乗ってみたり、見てみたりして仕組みを学んだ。
- ・ 今と昔の米作りの違いを知るために、手作業体験だけでなく、機械作業も見せてもらった。

【配慮事項】

- ・ 田植えや収穫の際には保護者にも呼びかけて、事故の防止に努めた。
- ・ 水の管理や収穫がうまくいくように、農家の方に定期的に来ていただいた。

体験活動の支援体制

- ・ 地域の農家の方 → 米作り指導、作業説明、講話等
- ・ J A職員 → 田植え、収穫支援
- ・ 保護者の方々 → 作業支援（米作り、収穫祭、縄ない、わら草履作り）

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 米が一年を通してどのような時期にどのようなことをして作られるのか、体験を通して学ぶことができた。
- ・ 米の大切さを理解し、給食の時にはお米を一粒も残さず食べるようになった。



【課題】

- ・ 農家の方が高齢のため、続けて教えていただける方を見つける必要がある。
- ・ 児童にとって、受け身的な活動となっている部分があるので、より主体的に取り組めるカリキュラム編成が必要である。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 米作りを通して、学校・家庭・地域の関係を密にし、役割分担を明確にしていきたい。
- ・ 観察記録やまとめなどの掲示場所を工夫したり、児童朝会で発表したりすることで、米作りで学んだことを、全校生に伝えていけるようにしたい。



近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：三田市立つつじが丘小学校

学 年：小学3年生

お米はかせになろう！田植え、稲刈り、脱穀・精米、おにぎり作り、わら細工！

学習のねらい

- ・ 毎日のように食べている米について、どのように作られているかを知り、わたしたちの暮らしとのつながりについて考える。
- ・ 体験活動など地域の人びととのふれあいを通して、地域・人に対する思いやりと感謝の気持ちを育てる。
- ・ 苗づくりから精米まで、お米として食べるまでの過程を学習し、農家の苦労や努力を知り、農作物を大切にする気持ちを育む。
- ・ 食について、食べることと成長や活動とのつながりを学習し、規則正しい食生活について考える。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「畑ではたらく人びとの仕事」からつながる。
- ・ 5年生の「米作りのさかんな地域」へつなげる。

活動の展開（28 時間）

事前学習（5 時間）

- ・ 米作りについて調べよう。
学校図書館や地域で農業をされている方から資料を集め、米作りの1年について調べる。

体験活動①（3 時間）

- ・ 田植えをしてみよう。
- ・ 五感を使って田んぼを感じよう。
- ☆ 地域の老人会（住吉クラブ）の方から、お米の育て方や田植えの方法の今昔、米作りの工夫や努力を教えてもらう。
活動場所：校区にある地域協力者の田んぼ1枚

体験活動②（3 時間）

- ・ 稲刈りをしてみよう。
- ・ 春の田植えのときとの違いを見つけよう。
- ☆ 地域の老人会（住吉クラブ）の方から、稲刈りの方法の今昔、収穫作業のコツなどを教えてもらう。

体験活動③（2 時間）

- ・ 脱穀と精米をしてみよう。
- ・ 脱穀と精米の今昔をくらべよう。



田植えの様子（5月）



稲刈りの様子（10月）



千歯こきで脱穀する様子



とうみで選別する様子

- ☆ 住吉クラブ、学校博物館の方から、脱穀の方法の今昔を教えてください、昔の機械の仕組みについて学ぶ。

体験活動④（3時間）

- ・ 自分たちで刈り取った米を使っておにぎりを作ろう。
- ・ 食べることの大切さを学ぼう。
- ・ 住吉クラブのみなさんに感謝の気持ちを伝えよう。



保護者とおにぎりづくり

体験活動⑤（2時間）

- ・ クリスマスリース、正月しめ縄飾りを作ろう。（わら細工）
- ☆ 昔からのわらの活用方法を住吉クラブの人に教えてもらう。



わら細工の指導を受ける様子

事後学習（10時間）

- ・ 米作り劇、米作り唄で表現しよう。
（米作りをひとつのストーリーにした劇や昔からの田植え唄など調べて学習したことを唄にして発信する。）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 体験活動の全てに地域の老人クラブ（住吉クラブ）のみなさんに指導者になっていただき、子どもたちが年間を通じてつながりをもつことができるようにした。
- ・ 住吉クラブ、学校敷地内にある学校博物館と連携し、田植え、稲刈り、脱穀、精米といった米作りの工程の昔の方法と現在の方法を比べながら学習できるように、千歯こき、足踏み式千歯こき、とうみなど昔の道具や機械、現在の農業機械であるコンバインを用意した。
- ・ 収穫した米を食べる活動では、PTA 学年活動とつなげ、給食センターより栄養教諭を招聘し、食べることと体の成長や1日の生活のエネルギーの食育学習の場を設定した。
- ・ 米を食べるだけでなく、稲作でできたわらも大切に活用していたことを知り、クリスマスリースや正月のしめ縄飾りをつくり、季節の移り変わりを感じられるような交流の場を設定した。



【配慮事項】

- ・ 田植えや収穫作業の際には、老人クラブ(住吉クラブ)のたくさんの方の協力を得て、児童に付き添っていただき、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- | | | |
|-----------------|---|-------------------------------------|
| ・ 校区の老人会(住吉クラブ) | → | 田植え、稲刈り、脱穀、精米、米作りの講話、わら細工の指導、田んぼの提供 |
| ・ 学校博物館職員 | → | 脱穀、精米の作業の指導、昔の機械の準備 |
| ・ P T A | → | おにぎり作りの準備と指導支援 |
| ・ 栄養教諭（給食センター） | → | 食育の講話 |

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 米作りの学習を通して、農作物がどんな自然条件の中、どのような作業で作られているのか、いろいろな作物づくりの1年が考えられた。
- ・ 実際に田んぼに入り、田植え体験や稲刈り体験をすることにより、自分の五感を使って自然を感じることができた。
- ・ 一連の体験により、児童は生産や収穫の喜び、食べ物大切さを実感し、給食の食材について関心をもつと同時に、好き嫌いや残食について考えるようになった。
- ・ 住吉クラブ、保護者、児童という、給食がなかった世代、パン給食だった世代、米飯給食の子どもたちの3世代でおにぎりを食べる給食交流会をすることで、それぞれの学校での昼食のことを話す機会になり、社会科の昔の暮らしにつながる学習ができた。

【課題】

- ・ 田植えをしてから収穫するまでの作業は、すべて地域の老人会任せである。児童が「自分たちで育てた」と感じられるようにするためにも、収穫までの間に関わっていくことが望ましいが、学校と田んぼが離れていることもあり時間の確保が課題である。
- ・ 児童にとって、受け身的な活動となりがちである。
- ・ 来年度も今年度お世話になった関係者から支援が得られることになっているが、今後も継続して得られるかどうか課題である。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 米作り体験を通して、児童に何を学ばせたいのか、活動場所と学校との距離があることをふまえて、学習プログラムやねらいなど、検討と体験活動関係者間での共通理解を図っていききたい。
- ・ 食育の面でも学習したことを学校全体に広げられるよう活動を充実させたい。



【参考：体験後の児童・保護者・住吉クラブ（活動指導者）の声】

- ・ 「田んぼに入ると足の指の間からどろがぬるぬると通り抜けて気持ちよかった」「田んぼの水のところはあたたかいけれど、どろの中は少し冷たく感じるよ」「どろのにおいは、学校の畑とはちょっと違うよ」と五感を使って、田んぼの自然を感じていた。
- ・ 「稲って植えるときは数本だったのに刈り取る時には20本以上になっていたよ」「穂がついたら重たかったよ」「鎌で稲株を刈り取るときに、力の入れ方を覚えるとどんどん切れたよ」と生長に対するよろこびや収穫する楽しさを声にしていました。
- ・ 「自分たちで刈り取ったお米で作ったおにぎりはおいしい」「朝ごはんは、午前中にしっかり頭をはたらかすように、体が動くようにするためにしっかり食べないといけなかった」と食べるよろこびと朝食の大切さを親子で確かめる機会になった。
- ・ 老人会の方も、「子どもたちが「ありがとう」と言ってくれることがうれしく、自分たちも地域の子どもたちのためにできることをしていきたい。子どもたちの学習で協力できることがあれば言ってほしい」と地域の方との連携、開かれた学校づくりの機会になっている。

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：猪名川町立大島小学校

学 年：小学5年生

米作りから人々とのつながりを考えよう。

学習のねらい

- ・ 私たちの食生活と食料生産を学習する中で、校区内の農業に関心をもち、地域の方の協力を得て米作りを行う。
- ・ 校区内の農業が自分たちの生活に大きく関わってきたことを調べ、みんなの前で発表する。
- ・ 進んでこれからの農業について考え、意見がもてるようにする。

社会科学習とのかかわり

- ・ 私たちの食生活と食料生産（5年社会科）

活動の展開（20 時間）

事前学習（5 時間）

- ・ バケツでの米作りに挑戦する。

体験活動（10 時間）

- ・ 田植えをしてみよう。
- ・ 稲刈りを体験し、コンバインでの作業を見学しよう。
- ・ いろいろな国や地域の米を食べ比べしよう。
- ・ もち米でもちつきをしよう。

※活動場所：学校近くにある地域協力者の田んぼ 1 枚

事後学習（5 時間）

- ・ 収穫の喜びや米作りの苦労や工夫について調べ、壁新聞にまとめる。



体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 田植えの時期の調整
- ・ 体験学習だけに終わらないように事前に理科や家庭科において稲（植物）、米（食品）について学習をして取り組んだ。

【配慮事項】

- ・ 田植えや収穫作業の際には、数名の学校職員が指導補助を行い、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- ・ 学校支援地域ボランティア（地域協力者） → 田んぼの提供、田植え、収穫作業の指導、作業補助、田んぼの管理

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 田植えの大変さを理解できた。
- ・ 米作りをする人たちの思いを感じ取れた。
- ・ 自ら収穫する喜びを味わえた。
- ・ 農業について考えるきっかけとなった。
- ・ 学習後、米飯給食の喫食率が上がった。

【課題】

- ・ 除草や水管理など日常的な取り組みができなかった。
- ・ 農業の大切さには気づけたが、昨今の課題（農業従事者の減少等）にまで目を向けるには至らなかった。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 米作りが果たしてきた役割について理解するだけでなく、積極的に米作りに参加しようとする態度を育てたい。
- ・ 将来の農業について自分なりの考えをもち、進んで自分たちの食生活を見直そうとする態度を育てたい。

【参考：その他の取組】

本校では、米のほかに1、2年生が地域の方に畑をお借りして、サツマイモの栽培を行っている。3年生は、阪神北県民局、J A兵庫六甲猪名川営農支援センター、猪名川町教育委員会等のお世話になって、大豆の地産地消モデル事業、「学びの農」推進事業として、大豆の栽培、加工（みそづくり）体験にも取り組んでいる。



ヒラメの稚魚放流・漁港やノリ加工施設の見学

実践校名：高砂市立伊保南小学校
学 年：小学3年生

ふるさとの海（伊保の海）へ レッツゴー！

学習のねらい

- ・ 五感を使って海と触れ合い、その美しさ、偉大さに感動する豊かな心を育む。
- ・ 身近な海の生き物をとおして、命の大切さを感じるとともに、命のつながりを学ぶ。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「はたらく人とわたしたちの暮らし」とつながる。
- ・ 4年生の「わたしたちの県」へつながる。
- ・ 5年生の「わたしたちの生活と食料生産」へつながる。

活動の展開（70 時間）

事前学習（20 時間）

- ・ 昨年度の3年生の伊保漁港での活動内容や報告を聞こう。
- ・ 校区内を探検し、校区の自然環境について調べよう。
- ・ 伊保の海の紹介DVDを見てみよう。



魚との触れ合い体験の様子

体験活動（32 時間）

- ・ 伊保の海で獲れる魚に触れよう。
- ・ ヒラメの稚魚を放流しよう。
- ・ 漁港で働く方にインタビューしよう。
- ・ ノリ養殖漁場やノリ加工場を見学しよう。
- ・ 手すきノリ作りを体験しよう。

活動場所：校区内の漁港



稚魚放流体験の様子

事後学習（18 時間）

- ・ 伊保の海について考え、グループでまとめよう。
- ・ まとめたことをポスターにして、2年生に紹介しよう。
- ・ 伊保漁業協同組合の方々へお礼のお手紙を書こう。



ノリ作り体験の様子

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ それぞれの体験活動に合わせたメモ用のワークシートを用意した。
- ・ お礼のお手紙を書くことで、伊保漁業協同組合の方々への感謝の気持ちを実感させるとともに、交流が深められるようにする。

【配慮事項】

- ・ 稚魚の放流体験やノリ作り体験などの際には、教師や漁業協同組合の方などの付添者の人数を増やし、安全確保に努めた。

体験活動の支援体制

- ・ 伊保漁業協同組合 → 乗船、稚魚放流の説明・体験
ノリ養殖漁場と加工場の説明・見学
手すきノリ作りの説明・体験

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ これらの体験により、児童は日頃意識していないすぐそばにある「海」を身近に感じたり、「自然の大切さ」や「命の大切さ」を実感したりすることができた。
- ・ 漁業協同組合の方との交流を通し、海で働くことのやりがいや苦勞、工夫、願いなどを知ることができた。

【課題】

- ・ 漁業協同組合の全面的な協力によって可能な活動であるため、今後も学校の教育活動に対する理解と協力が得られるかが課題である。
- ・ 漁業協同組合との連絡調整をさらに密にし、年度当初から計画的に取り組むことでゆとりある準備と実行を可能にしたい。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 「食育」の面でも学校全体、地域にも広がりをもたせた取組にしたい。
- ・ 稚魚の放流やノリ作り体験を通し、何を教えたいのか、何を感じ取らせたいのかということについて学校・家庭・地域でさらに検討し共通理解を図っていきたい。

【参考：子どもたちが書いた見学新聞より】

- ・ タコのあたまは、しわしわでした。タコの足のてんてんのあるところをさわってみたら、中にすいこまれるようなかんじだった。
- ・ 船は2千万円ぐらいのお金を使っている。さらに、一人で買っている。漁師さんは、夕方5時から午前2時まではたらいていると聞きました。
- ・ もぐり船は、うきながしたノリを船の上にあみをのせて、ノリをきかいでとっておとします。

【参考：子どもたちが書いた漁業組合の方へのお礼のお手紙】

- ・ 伊保漁協のみなさん、船にのせてくれたり、魚をさわらせてくれたりしてありがとうございました。「これはどういう魚ですか」と聞いたら、やさしく答えてくださってよくわかりました。りょうしさんは、みなさんやさしいと思いました。わたしが、かにをさわる時、「ここをもったらいいんやで」と教えてもらって「なるほど」と思いました。ノリの工場を見学するときもよろしくおねがいします。
- ・ 伊保漁港のみなさん、きのうはありがとうございました。ヒラメのほうりゅうや、魚をさわらせてもらったりして、楽しかったです。ヒラメの赤ちゃんは、とっても小さくてかわいかったです。見学をして分かったことが、一つあります。命の大切さです。命の大切さをほかのじゅぎょうでもみつけられたらいいなと思います。ありがとうございました。

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：稲美町立加古小学校

学 年：小学3年生

米作りを通して、命の大切さを感じよう

学習のねらい

- ・ 米作りの体験を通して、農家の人々の苦労や喜びを実感するとともに、米作りに従事する人々の願いを受けとめ、自然の恵みに感謝する心や生命を大切にすることを育成する。
- ・ 米作りを指導していただく地域ボランティア（中新田営農組合）の方々との交流を通して、感謝の気持ちや地域の人々とコミュニケーションしようとする態度を養う。

社会科学習とのかかわり

地域には農作物の生産にかかわる仕事があり、自分たちの生活を支えていることや、これらの仕事に見られる特色、他地域とのかかわりなどを理解するとともに、農家の仕事と自分たちの生活とのかかわりを体験を通して考えようとすることは、社会科学習を深めることにつながる。

活動の展開（15時間）

事前学習（3時間）

- ・ 校区の田について観察しよう。
- ・ どんな農作物が育てられているか調べよう。
- ・ 米作りについての話を聞こう。

お米作りのお話

お米作りについてのお話を聞きました。ゲストティーチャーとしてお迎えしたのは、JA兵庫南稲美営農経済センターのセンター長さんです。1年間のお米作りについての話をしていただきました。種蒔きからお米になるまでを、日を追いつながりながら楽しく教えていただきました。特に、もうすぐ行う田植えについては、

※植える時、浅すぎると苗が流れてしまいます。

※深く植えすぎると、なかなか大きくなりません。

※2～3本を2～3cmの深さに植えるとちょうど良い。ということでした。

最後に、強調されたことは、お米は、1年に1回しかとれないので、無駄にしないということでした。子どもたちは、真剣に学び、メモをとっていました。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 私が一番心に残った言葉は、「米は、1年に1回しかとれないので、残さず食べてください。」です。なぜなら、私は、時々家で残っていたからです。そして、米作りには、長い年月がかかるんだなと思いました。
- ・ お米を植えるときは、第1関節までぐっと入れて植えるとよいと言われていました。お米は、1年に1回しかとれないので、苗をいっぱい植えたらいいなと思いました。



体験活動（10時間）

- ・ 田植え体験をしよう。
 - ・ 収穫体験をしよう。
 - ・ お米を炊いて、おにぎりを作ろう。
- 活動場所：近くの田んぼ

田植え体験

田んぼに着くと、営農組合の方々が、準備の真っ最中です。クラスを2つに分けて、北からと南からの二手に分かれて田植えの開始です。

「先生、もう入っていいですか。」

「にゆるにゆるして、気持ち悪い。」

「田んぼの中に、虫がいっぱいいる。」

「先生、足が抜けません。」など口々に言いながら、みんな楽しんでいる様子です。

10時過ぎ、ほぼ植え終わりました。

子どもたちは、虫を捕まえたりするのも楽しそうです。

「今年は上手に植わったなあ。」と褒めていただきました。営農組合の方々にお世話になりながら、しっかり田植えの体験をすることができました。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ お米を作ること（田植えをしたりする）は、とてもしんどいことなんだなあと思いました。田植えも、大人の人のように真っ直ぐ一直線に植えることができなかったけど、とても楽しかったです。
- ・ 田植えは、思っていた以上に楽しかったです。秋には、稲刈りをするのでどれだけ育てているか楽しみです。

収穫体験（稲刈り）

絶好の稲刈り日よりの中、子どもたちは、長そで、長ズボン、長ぐつをはいて元気に出発です。現地に着いたら、中新田営農組合の方々がお待ちです。いよいよ稲刈りの開始です。

鎌を1人ずつにわたして、稲を刈っていきます。初めての体験の人がほとんどです。上手な人は、どんどん進んでいきます。子どもたちは真剣です。最初はとても苦労していました。しばらくすると、だんだん慣れてきて、どんどん進んでいきます。3分の1ぐらい刈ったところで終わりです。しばらくコンバインで刈り取るのを見学しました。

次は、刈った稲をくくってもらって、それをいなきにかけていきます。

昔ながらの足踏み式の脱穀機も体験しました。子どもたちは2人組で踏むだけですが、稲の穂が機械にあたると重くなって止まってしまいます。昔の人は、これを1人でしていたんだなあと思うと農作業の大変さがよく分かります。

最後に、1人ずつコンバインの運転席に乗せていただきました。子どもたちは大満足です。帰りながら、「もっと刈りたかったな。」と言っていました。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 私は、お米のことをあまり考えたことがなかったけど、稲刈りをして、こんなに大変なことをやっていたんだなあとお米に興味を持つようになりました。稲刈りの仕方を教えていただきありがとうございました。
- ・ 緊張しすぎて切りにくかったけれど、慣れてくると切りやすくなってきました。途中で手を切りそうになりました。かたいのがあったので切りづらかったです。やわらかいのは一発で



切れました。そのときはとても楽しかったです。

おにぎり作り

さあ、いよいよ自分たちが育てたお米を使って、おにぎりを作ります。5年生のお兄さん・お姉さんと一緒に、まず、ご飯を炊きます。ぶつぶつと、ご飯が炊けていく様子をしっかり観察し記録していきます。炊きあがったら、ご飯をラップにとっていきおにぎりを作っていきます。

「あつっ、あつっ。」

「きれいな三角にならないなあ。」

など、口々に言いながらも楽しみながらおにぎりを作りました。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 自分たちが育てたお米でおにぎりを作って食べたら、いつも食べているおにぎりよりおいしく感じました。



事後学習（2時間）

- ・ お世話になった方々にお礼の手紙を書く。

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 子どもたちが、十分活動できるように、打ち合わせを入念に行い、田植えにおいては、予め植えやすいように2・3本の塊になるような苗を育てていただいたり、実際に植えるときには、2方向から植えられるように工夫した。
- ・ 稲刈りでは、今ではあまり行われていないような、稲をいなきにかける作業を取り入れるなど、昔ながらの米作りが体験できるようにした。

【配慮事項】

- ・ 子どもたちが安全に作業できるように、多くの教師や大人の目が行き届くような体制作りに努めた。

体験活動の支援体制

- ・ J A兵庫南 経済部 稲美営農経済センター → 米作りの概要の説明
- ・ 中新田地区営農組合 → 田植え、稲刈りの補助

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 農家の方々の米作りの大変さを学ぶことができた。また、周りの環境を考え、生育環境に配慮しながら栽培されていることを学び、生命のすばらしさを感じ取ることができた。

【課題】

- ・ この学習をさらに生かすために、他教科との関連を図り、自然を大切にしていこうとする態度を育てていきたい。
- ・ 食育教育への発展を図るために、具体的な計画作りを進めていきたい。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 5年生と連携して、とれたお米でご飯を炊いて、おにぎりを作る活動を実施したが、いろいろな学年と協力し、学校全体としての食育教育にも取り組んでいきたい。

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：加西市立下里小学校

学 年：小学3年生

人・自然・昔にふれる米作り

学習のねらい

昔ながらの米づくりの作業を地域の方々に学び、先人の知恵や工夫、苦勞を知る。同時に生産や収穫の喜びを感じ、自然とのつながりを理解し、食べ物大切さを感じ取ることができるようにする。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「昔の道具とわたしたちの暮らし」へつなげる。
- ・ 5年生の「米作りのさかんな地域」へつなげる。

活動の展開（16時間）

事前学習（2時間）

- ・ 校区の土地利用の様子を高いところから見てみよう。
- ・ 代表作物であるお米づくりを地域の方に教えてもらおう。

体験活動（10時間）

- ・ 田植えをしてみよう。
- ・ 肥料まきをしよう。
- ・ 稲刈りをしよう。
- ・ 脱穀体験をしよう。（唐箕をつかってみよう。）
この後、倉庫にある大型機械数種類を見せてもらう。

- ・ 育てた米を食べよう。

活動場所：学校近くにある営農組合の田んぼ1枚

事後学習（4時間）

- ・ 苗を植えてから米へと育つまでの過程や各作業のポイント、学んだことを2年生に紹介しよう。
- ・ お世話になった地域の方々へお礼の手紙を送ろう。



田植えの様子（6月）



脱穀作業の様子（9月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 地域の方々と触れ合い、各農作業の手順やポイント及びその理由を児童に考えさせる場を設けてから、農作業と一緒に始めてもらうことで、先人の工夫や知恵に気付かせようとしている。
- ・ 山に降った水が池に入り、その水が田んぼを潤す。それが稲やそこにすむ生き物を育てるなど、命のつながりや自然の大切さなど、児童の道徳性を高める話もしてもらう。
- ・ 昔の道具を使った米作りをすることで、社会科の「古い道具とわたしたちの暮らし」の単元を学ぶきっかけづくりとする。

【配慮事項】

- ・ 田植えや収穫作業の際には、できるだけ多くの地域の方々の協力を得て、児童に付き添っていただき、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- ・ 地元生産者（営農組合） → 田んぼの提供、作業の指導、各作業前講話、各農作業の補助
- ・ J A兵庫みらい善防支店 → 環境体験の広報活動

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 営農組合の代表の方が元学校の先生ということもあって、人の知恵や自然とのつながりなどを児童に話していただいた。おかげで、大変分かりやすく、毎回学習に新たな発見があった。また、たくさんの方々の補助で安心して作業が進められ、1人1人が米を収穫したという感動が大きい。
- ・ 今回、昔の道具（足踏脱穀機や唐箕）をたくさん調達していただき、先人の工夫を学ぶことができた。また、その工夫や知恵が今の大型機械につながっているという話もしてもらい、現代の農作業についても学ぶことができた。5年生の社会「日本の農業」への移行が楽しみである。
- ・ 収穫した米は自分達だけで食べるのではなく、給食のメニューに「3年生がつくったお米」として登場させ、全校生に味わってもらおう。このことで作った喜びや食べ物の大切さを学んだようである。2年生に体験した米作りを紹介した際、どの児童も自信に溢れ、作業のポイントやこの体験で学んだこと、感じたことをしっかりと伝えることができた。

【課題】

- ・ 田植えをしてから米へと育つまでの過程は、ほとんど地域の方々（営農組合）任せであるため、児童が「自分たちで育てた」という意識をもう少し持たせるためにも、成育途中の段階で何度か足を運ぶ必要がある。その時間の確保が課題である。

課題をふまえた今後の取組

- ・ まだまだ地域の方々（営農組合）がお膳立てをして米作りを行っていることが大きいので、もう少し積極的に米作り作業に関わらせたい。
- ・ 食育の面で学校全体に広がりを持たせていきたい。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 肥料をまいていると、カブトエビがいました。何でいるのかなあと考えていたらおじさんがその話をしてくれました。カブトエビがいると草を食べるために動くので、水がにごって、もや草が生えないそうです。田んぼに入った水が米だけでなく、カブトエビも育てています。
- ・ だっこくは足でふんでします。ぼくは、電気のマシンですとっていました。電気を使わないから節電、エコだと思いました。昔の人の作業に感心してしまいました。
- ・ 営農組合のおじさんたちが、いろんな仕事をやさしく教えてくださったので、うれしかったです。一番おもしろかった作業は、いねかりです。おじさんたちが、「こうやって切ったらいいよ。」と教えてくださり、やってみたら上手に切れたのでうれしかったです。本当におじさんたちにお世話になりました。
- ・ わたしのおじいちゃんは営農組合です。土日の間、雨でもがんばってびしょぬれになりながらも田んぼに生えている草を引いたりしていました。だから、すごくがんばって、みんなのために育てているということが伝わってきました。だから、ごはんを食べるときは、残さず食べたいです。



校内農園でのもち米づくり体験

実践校名：加東市立社小学校

学 年：小学6年生

もち米の魅力を見つけよう、伝えよう、いたごう ～もっちー博士のもちもち研究所～

学習のねらい

- ・ 学級園やペットボトルでもち米を育て、観察、調べ学習をすることで、お米に関する知識や食に対する関心や意欲を育てる。
- ・ 育てたもち米を使ってもちつきをしたり、わらを用いてしめ飾りを作ったりして、日本の伝統文化に親しむとともに収穫の喜びを感じさせる。

社会科学習とのかかわり

- ・ 5年生の「米作りのさかんな庄内平野」からつなげる。
- ・ 6年生の「縄文のむらから古墳のくにへ」からつなげる。

活動の展開（30 時間）

事前学習（2 時間）

- ・ お米はどこから来たのだろうか。（1 時間）
- ・ お米作りの仕方を知ろう。（1 時間）

体験活動（20 時間）

- ・ たねまき、水やりをしよう。（1 時間）
- ・ 田おこし、代かき、田植えをしよう。（3 時間）
- ・ 生長の記録をのこそう。【観察】（8 時間）
- ・ 稲刈り、脱穀、もみすりをしよう。（2 時間）
- ・ 収穫を喜ぼう。【しめ縄作り、もちつき体験】（6 時間）

活動場所：学級園（約 10 m²）及びその周辺
調理実習は食育活動として別活動

事後学習（8 時間）

- ・ ごりようが丘フェスティバル（学校行事）で調べ学習の発表やお店をしよう。（7 時間）
- ・ お世話になった老人会のみなさんへお手紙を送ろう。（1 時間）



水泳前に田植え体験



大きくなれ、ペットボトル稲

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 老人会の方々としめ縄作りやもちつきで交流することで、地域の方との親睦を深めることができた。
- ・ 自分たちで始めから終わりまで育てたり、昔の道具の「千歯こき」を他校から借りて脱穀したりすることで、農作物を育てる苦労や昔の人の苦労や知恵を感じさせた。

【配慮事項】

- ・ 農具を使う際には、多数の職員を配置し、事故の防止に努めた。

体験活動の支援体制

- ・ 老人会 → しめ縄作り、もちつきの指導、補助、講話

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 栽培体験から、製作体験、食育体験まで幅広く活動することができた。特に、日々、生長の過程を観察することで、お米に対する愛情を育むことができた。給食のご飯つづを残さず食べるようになった。
- ・ 県下でも有数の酒米の産地であるので、米作りに興味を持ち、手伝いをするなどの児童が増えた。
- ・ 食育体験で米粉を使った「焼きもち」の調理実習に挑戦し、楽しく活動できた。また、レシピを印刷して配付することで、家庭でも同じ料理に挑戦する児童が多かった。
- ・ 「ごりようが丘フェスティバル」という保護者や地域の方を招いて児童がお店活動などを行う学校行事では、『もちー博士のもちもち研究所』と題して、米の学習を生かした掲示物や、もち米にちなんだ楽しいゲームを行うことができた。



ペットボトル稲の生長

【課題】

- ・ 夏休み中の水の管理が難しく、児童だけでは行えなかった。
- ・ 学習した後の食に対する感謝の気持ちは芽生えたが、継続させる手立てが打てなかった。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 6年生の体験学習より、5年生の体験学習の方が、ふさわしい学習内容なので、次年度に検討する。
- ・ 収穫できた量が丼で4～5杯と少量なため、もち米を購入して食育活動等にあてた。そのため、ご近所から田を借用して収穫量を増やしたり、少量でも価値のある古代米を育てたりするなどの手立てが必要と考える。



ごりようが丘フェスティバル出店① ごりようが丘フェスティバル出店② 老人会とのもちつき



食育活動「やきもち作り」



老人会とのしめ縄作り

近隣の田んぼでの米づくり体験

実践校名：姫路市立糸引小学校

学 年：小学3年生

一粒の命を？粒に ～米作りを通して自然の恵みと命のつながりを学ぶ～

学習のねらい

宅地開発が急速に進む糸引校区において、農作業の手伝い等の経験がある児童はほとんどいない。そこで、米作りを通して勤労の尊さや収穫の喜びを体感させることにより、自然の恵みに感謝し、命を大切にする心を育む。

社会科学習とのかかわり

- ・ かわってきた人々の暮らし（3年）につなげる。
- ・ 私たちの生活と食料生産（5年）につなげる。

活動の展開（30 時間）

事前学習（6 時間）

- ・ 植物の種をまいて一人一鉢を育てる。
- ・ 種籾一粒から何粒の米粒がとれるか予想する。
- ・ 水が入る前の田を見に行く。
- ・ 地域の指導者による出前授業により、米作りの概要を知る。
- ・ トラクターを使用しての田起こしを見学する。

体験活動（20 時間）

第1回

- 【内容】 田植え体験
【日時】 6月15日（金） 9：00～
【場所】 糸引小学校 借用地 東山
【目的】 田植え体験をすることで、泥の感触、稲の手触り、虫の様子などを五感で感じ取る。田植えについて実感を得ながら理解する。
【参加者】 3年生児童（161名）、農作業ボランティア（3名）



第2回

- 【内容】 田んぼの草刈り体験
【日時】 9月14日（火） 9：00～
【場所】 糸引小学校 借用地 東山
【目的】 米を作るには草刈りが不可欠であることを理解する。鎌を使った草刈りを体験する。
【参加者】 3年生児童（161名）



第3回

- 【内容】 田んぼの稲刈り体験
【日時】 9月21日（水） 9：00～
【場所】 糸引小学校 借用地 東山
【目的】 鎌を使った稲刈り体験をし、機械を使わない

昔の人たちの苦勞を知る。植えた頃の稲と育った稲の違いについて理解する。

【参加者】 3年生児童（161名）
地域ボランティア（2名）、保護者（14名）



第4回

【内容】 里山地域の自然体験
【日時】 10月5日（火） 12:00～
【場所】 姫路市自然観察の森

【目的】 普段体験している市街地の中の自然ではなく、里山の自然について理解し、その違いを感じる。

【参加者】 3年生（161名）、自然観察の森レンジャー（1名）



第5回

【内容】 脱穀体験
【日時】 10月19日（水） 9:00～
【場所】 糸引小学校 借用地 東山
【目的】 昔ながらの足ふみ脱穀機とハーベスターでの脱穀を体験し、収穫の喜びを味わう。

【参加者】 3年生児童（161名）
地域ボランティア（2名）、保護者（14名）



事後学習（4時間）

【内容】 感謝祭
【日時】 12月9日（金） 9:00～
【場所】 糸引小学校 体育館
【目的】 ①これまでの米作りの実体験を振り返り、学習を深める。
②米作りを手助けして下さった方に、学習の成果と感謝の気持ちを伝える。

【参加者】 3年生児童（161名）、保護者（2名）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 教師がお世話になる農家に何度も足を運び、稲を育てていく上での苦勞や工夫を聞く。
- ・ 農家と事前に打ち合わせをして、子どもたちの理解度などを伝えるとともに、子どもたちに伝えてほしいことなどを伺う。

【配慮事項】

- ・ イネ科のアレルギーのある児童には、長袖・長ズボン・マスク・タオルなどを着用させた。
- ・ 田植えや稲刈りなど天候が作業に大きく影響するものに関しては、そのタイミングを農家と前もって話し合っておく。

体験活動の支援体制

- ・ J A兵庫西 姫路灘支店 → 稲・資材の販売
- ・ P T A → 田植え、収穫作業の補助
- ・ 地元生産者 → 田んぼの提供、脱穀機・精米機の貸し出し、作業の指導、講話、年間の活動計画立案への協力
- ・ 給食業者 → 炊飯

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 稲作に対する関心が高まり、米作りの大変さと農家の人々の苦勞を知ることができた。
- ・ 給食などの食事も残さずに食べようとする等、お米を大切にしようとする意識が高まった。
- ・ 地域の方々とのつながりが深まり、感謝の気持ちを持って接することができるようになった。

【課題】

- ・ 各活動での地域ボランティアの方の説明が子ども達にとっては難しかったので事前に打ち合わせをして、子どもが理解できる範囲を伝えておくことが必要であった。
- ・ 花粉症・アレルギー対策として、長袖・長ズボン・マスク・タオルなどを着用させたが、症状がひどくなる恐れのある児童に関しては見学のみで体験させることができなかった。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 米作りが果たしてきた役割について理解するだけでなく、積極的に米作りに参加しようとする態度を育てたい。
- ・ 将来の農業について自分なりの考えをもち、進んで自分たちの食生活を見直そうとする態度を育てたい。

【参考：その他の取組】

- ・ 動画などを用いて、稲作の大まかな流れを予め学んでおくと、その後の活動への理解がさらに深まる。
- ・ 手作業での稲作から、機械化していくまでの過程を合わせて学ばせておくと効果的である。
- ・ 借用田に行く機会を増やすなど、借用田が児童にとってもっと身近な存在になるような工夫が必要である。

【参考：体験後の子どもたちの声】

このまえ同じ田んぼで泥んこ遊びをした時に比べたら、土はすごく固かったけど、今日田植えをした時に土を踏んだら軟らかかったです。田んぼの中にはトンボの幼虫がいました。黄緑色の小さな虫を見つけて、楠田さんにたずねると「人間の血を吸う虫だよ！」って教えてくれました。稲を植える時は、根っこを持って3本ずつに分けます。思ったより根は固かったです。

田んぼに入ると中島さんが教えて下さった忍者歩きをするのが難しかったです。僕は下手なので忍者のように歩くことができませんでした。

田植えの時のどろんこ遊びも楽しかったけれども、鎌を使って草を刈るのも楽しかったです。早く、鎌を使って稲刈りをしたいです。楽しみにしています。

田植えをする時に、中島さんが「稲を植える時は間をあけて植えてね」と言われたのは、すき間があると太陽がよく当たり稲がよく育つことや、今日の草刈りの時などに通りやすいからでした。少し暑かったけど楽しかったです。

今日脱穀をしました。足ふみ脱穀機とハーベスターの両方を体験しました。私はどちらかというと足ふみ脱穀機のほうが好きです。なぜならしんどくて時間がかかるけど、「自分でやった」と感じるからです。ハーベスターのほうが楽でした。足ふみ脱穀機は重くて疲れました。昔の人は大変だと思いました。

近隣の田畑での米とサツマイモの栽培体験

実践校名：市川町立鶴居小学校

学 年：小学5年生

米とサツマイモ栽培を通じて、農業生産の実態を調べよう

学習のねらい

- ・ 身近な農作物である米とサツマイモ栽培を通じて、食料生産を行う農業の重要な役割に気づかせる。
- ・ 農業生産は、地形や気候などの自然環境を上手に生かしながら、生産を高める工夫や努力をしていることを理解させる。
- ・ 無農薬有機栽培、地産地消、生産者や生育履歴の明記など、新鮮で安全な食品を求める消費者の需要に気づかせる。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「農家の仕事」からつながる。
- ・ 5年生の「わたしたちの生活と食料生産」へつなげる。

活動の展開（12 時間）

事前学習（2 時間）

- ・ 米を栽培する田とサツマイモを栽培する畑の違いを観察してみよう。
- ・ 鶴居校区で栽培されている農産物と自分たちが消費している農産物を調べよう。

体験活動（8 時間）

- ・ 田植え前とサツマイモ苗さし前の準備を手伝おう。
- ・ 手植えでの田植え体験とサツマイモ苗さし体験をしよう。
- ・ 世話をしてくださる高齢者クラブの皆さんから、生長に従ってどのような作業が必要か教えてもらおう。
- ・ 手刈りでの稲の収穫作業と手掘りでのサツマイモ収穫体験をしよう。
- ・ 自分たちで収穫した米とサツマイモを使って調理し、高齢者クラブのみなさんを招待しよう。

※ 活動場所：近くにある田と畑 各1枚

事後学習（2 時間）

- ・ 農業生産の機械化と大規模化（集約化）の流れについて、体験活動をもとに発表しよう。
- ・ 校区に多い農産物の自家消費について考えよう。



田植え（6月）



サツマイモ収穫（10月）



稲刈り（10月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 効率的な体験活動と大型機械による作業能率の違いに気づくため、収穫の一部にコンバインを活用している。

- ・ 除草作業の軽減のために、サツマイモは黒マルチ被覆栽培を行った。

【配慮事項】

- ・ 農作業経験の豊富な高齢者クラブの皆様に、安全見守りを行ってもらった。

体験活動の支援体制

- ・ 校区の7地区 高齢者クラブの代表 → 田植え、蔓さし、収穫作業の補助
- ・ 地元生産者 → 粃の乾燥と選別作業
- ・ J A兵庫西 市川支店 → 稲苗、サツマイモ蔓の手配

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 児童は田と畑の違いを明確に意識していなかった。泥田での田植え体験を通じて、田の必要条件である水利の確保の重大さや高地の土地利用の工夫(ため池)にも気づくことができた。
- ・ 手作業後に機械による稲の刈り取りと脱穀を行うことにより、大型機械の作業効率の良さを体感できた。
- ・ 事前や事後活動により、児童が身近な所の農業生産の状況や安全な農作物を食したいという消費者ニーズを知ることができた。
- ・ 体験学習を通じて、児童と高齢者クラブとの継続したよい交流ができています。

【課題】

- ・ 体験活動による教育効果をあげるために、体験活動の内容(質)の向上をさらに図っていく必要がある。
- ・ 今後、農業生産の経験がある人材(高齢者クラブや地元生産者)が減少していく傾向にある。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 農作業の体験学習が、各教科の学習の質を高め、ふるさと意識を培っていくという大きな教育的意義を、地域や家庭に対して一層の理解を図っていきたい。
- ・ 児童に、自国で農業を維持していくことの必要性を認識させていきたい。

【参考：体験後の子どもたちの声】

■ほくほく祭り(収穫祭)：児童のお礼の言葉の一部より

老人クラブのおじいさん、おばあさん、夏の暑い暑い日でも、イモ畑の草刈りをしてくださってありがとうございました。田の水の世話もずっとしてくださいました。田植えや稲刈りでは、とてもいいに教えてくださいました。おかげでたくさんの米とサツマイモが収穫できました。そのお礼に、今日は私たちの料理を・・・(後略)

■授業での感想

- ・ 「コンバインって速いなあ。ぼくらが手で刈るスピードの何倍だろう。」「でも、すごくお金がかかるって聞いた。あの機械の値段が知りたいな。」
- ・ 「老人クラブの人が、手で植える田植えは何十年ぶりだろうと言っておられたよ。機械化した年代はいつからだろう?」
- ・ 「サツマイモに農薬は使わなかった。でもキャベツには農薬を使う。」「他の野菜は?」



コンバインも使用(稲刈り)

牡蠣養殖の作業体験・牡蠣加工場の見学

実践校名：相生市立相生小学校

学 年：小学3年生

ふるさとの海となかよくなろう！～牡蠣の生育調査を通して～

学習のねらい

- ・ 牡蠣の成育調査を通して、牡蠣の育ちには、すみかや食べ物などの海の環境が大きく関わっていることに気づかせたい。
- ・ 海の環境を守ることが、自分たちの環境を守ることにもつながっていることに気づかせ、自分たちにできることを考えさせたい。
- ・ 地域の方々にお世話になりながら、海の仕事の苦労や努力を知ることにより、食べ物を大切にすることを育み、地域社会に対する誇りと愛情を育てたい。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「わたしたちの住むまち どんなまち」からつながる。
- ・ 5年生の「わたしたちのくらしをささえる食料生産」へつなげる。

活動の展開（60 時間）

事前学習（2 時間）

- ・ 牡蠣のイメージをもとう。
- ・ 相生湾について調べよう。

体験活動（27 時間）

- ・ 牡蠣の種付け作業を体験しよう。
- ・ 水質調査をしよう。
- ・ 漁師さんに牡蠣の養殖の工夫や努力を教えてもらおう。
- ・ 牡蠣の成育調査をしよう。
- ・ 牡蠣の加工場で殺菌消毒作業やパック詰めを見学しよう。
- ・ ひょうご環境体験館で、森・川・海のつながりを学ぼう。
- ・ 牡蠣の収穫を体験しよう。
- ・ 牡蠣剥き体験をして、自分たちが育てた牡蠣を食べてみよう。

※ 活動場所：相生湾

事後学習（31 時間）

- ・ 牡蠣が育っていく過程を予想しよう。
- ・ 牡蠣の育ちをまとめよう。
- ・ 学習発表会で、牡蠣について発表しよう。
- ・ 学校間交流会で、一年間の牡蠣のまとめを発表しよう。



牡蠣の種付け（6月）



森・川・海のつながり（11月）



学習発表会（11月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 質問する内容などは、環境課の方や漁師さんや講師として教えていただく先生に事前に渡しておいて当日スムーズに進行するようにした。
- ・ 児童は7人と少数であるが、学校からは必ず2人体制で臨み、様々な人にお世話になるので、毎回しっかり挨拶ができるように努めている。

【配慮事項】

- ・ 児童は7人と少数であるが、学校からは必ず2人体制で臨み、様々な人にお世話になるので、毎回しっかり挨拶ができるように努めている。

体験活動の支援体制

- ・ 地元の漁師 → 牡蠣の種付けなどの作業の指導、収穫の補助（船を出してもらう。）
- ・ 漁業協同組合 → 地元漁師のスケジュール調整
- ・ 市役所の環境課 → 漁業協同組合や水産技術センターなどの施設との連絡
- ・ 県立水産技術センター、ひょうご環境体験館、相生湾自然再生会議 → 講師として牡蠣についての説明

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 校区の多くの方々の協力をえて、実際に体験する機会や見学する機会を多く持つことができた。そして、それらの活動を通して、海的环境と自分たちの生活との関わりについて理解を深め、環境を守ろうとする意欲・態度が高まった。
- ・ 自分たちが育てた牡蠣で成育調査をすることで、「相生の牡蠣」への興味・関心が高まり、地域に愛着をもつ気持ちが育った。
- ・ 自分たちの学びを発表する機会を設けたことで、児童のやる気が高まり、相手に分かりやすく伝えようとする発表練習ができた。

【課題】

- ・ 外へ出て行く活動であり、天候に左右される活動でもあるので、時間の確保が困難なときがある。
- ・ 自分たちだけでできる活動ではないので、時期や時間に制約があり主体的に動くことは難しい。
- ・ 関係機関、関係者の支援体制が今後も継続して得られるかどうかは課題である。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 自分たちが育てた牡蠣で成育調査をすることは、学ぶ意欲や考える力を伸ばしていくよい機会となるので、今後も環境体験学習を通して、地域を愛し、自ら学ぶ児童の育成を目指して取り組んでいきたい。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 「かきが大きくなってうれしいな」、「かきの育ち方がよく分かったよ」といった成長に対する喜びを聞くことができた。
- ・ 「漁師さんや工場で働く人がこんなに苦労して牡蠣をつくっているんだね」、「これからは食べ物感謝して食べたいです」などの感想があった。

いちじく畑の見学・いちじくジャムづくり体験

実践校名：太子町立太田小学校
学 年：小学3年生

太子町の特産品 太子いちじくを知ろう！

学習のねらい

- ・ 町の特産物であるいちじく畑の見学を通して、農業について興味を持たせ、栽培に携わる方の苦労や努力、工夫について理解できるようにする。
- ・ いちじくジャム作りを通して、特産物の活用について 加工グループの方の工夫や願いについて考え、感謝の気持ちや自分たちの地域を愛する気持ちを育む。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「ものをつくるひとはどことなくふうをしているの」からつながる。
- ・ 4年生の「土地にあわせてくらしはどんなようすなの」へつなげる。
- ・ 5年生の「自然にあわせて人々はどなくらしをしているの」へつなげる。

活動の展開（23 時間）

事前学習（5 時間）

- ・ ひょうご環境体験館で学ぼう。（6月）

体験活動（8 時間）

- ・ いちじく畑を見学しよう。（6月）
 - ・ 農家の方にいちじくの栽培について聞こう。（6月）
（努力、工夫、願い）
 - ・ いちじくの成長を観察しよう。（9月）
 - ・ いちじくジャムをつくらう。（9月）
- ※ 地域の支援者：栽培農家と加工グループ（4名）

事後学習（10 時間）

- ・ お世話になった農家の方や加工グループの方にお礼をしよう。
- ・ 学んだことを2年生やお家の人に伝えよう。（11月）



広田さんのビニルハウス



家庭科室でのジャム作り

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ ビニルハウスで栽培されている理由などをまとめられるように、事前に活動の趣旨を栽培農家の方と打合せをする。
- ・ いちじくの生長の過程がわかるように、6月と9月に見学をさせていただく。

【配慮事項】

- ・ ジャム作りでは、包丁を使ったりガスコンロで加熱調理したりするので、町の加工グループの方の支援を受けながら注意して実習をする。

体験活動の支援体制

- ・ 栽培農家 → いちじく作りの努力・苦勞・工夫を講話
- ・ 生活加工グループ → ジャム作りの指導
- ・ 町役場産業経済課 → 栽培農家、加工グループ、学校とのパイプ役



体験活動の成果と課題

(1) いちじく畑見学

見学を通して、味や形のいいいちじくをつくるために、農家の方たちが、色々な工夫をされていることを知ることができた。冬の寒さが厳しいと木が凍傷にかかったり、水が多すぎると水っぽくなったりという話を聞き、自然環境が収穫に大きく影響することを知った。ハウスの場合、冷害などの被害は受けにくいですが、虫や病気が発生すると大きな被害になる可能性があることなども知り、農家の方の苦勞と、そうしてできたいちじくの価値を知ることができた。



(2) いちじくジャムづくり

太子町特産品を使用した商品を発案、開発、販売している「太子町加工グループ」の方々と太子いちじくを使って「いちじくジャム」作りに取り組んだ。いちじくを煮詰めて最後にレモンを加えると、鮮やかに色が変わり、味も良くなることを児童は調理の楽しさを感じながら実感することができた。また、防腐剤を使わずレモンだけでジャムを加工することから、安全でおいしいものを作りたいという加工グループの方の願いを知ることができた。また、できたジャムを家に持って帰り、家族と一緒に味わいながら、太子町の特産品のいちじくについて家族に説明することができた。



(3) 2年生への発表

発表に向けて、分かりやすく発信するために、学習したことを新聞にまとめたり紙芝居にしたりして、グループ活動をした。見たり聞いたりしたことだけでなく、関わっている方たちへの感謝の気持ちや、工夫のすばらしさに感動したことなども伝えられるよう支援した。また今年度は、指導していただいた方も発表会にお招きした。子どもたちの発表を聞かれたどちらの指導者も、大変満足されていたのも成果の一つといえる。

以上のような活動を通して児童は、太子いちじくに、そしてそれに関わる地域の方に親しみを感じるとともに、太子町の特産品とするための様々な工夫や努力、苦勞や願いについて実感し学ぶことができた。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 発表会後の指導者とのお話の中で出てきた、いちじくジャムの販売数の伸びや特産品にするための児童のアイデアなど、活動の中に新たな視点も入れていく。
- ・ 本校は全校生1,115名の大規模校であるが、体験を通じた学びを大切にしていくために、より地域の方との連絡、連携を密にしていく。

近隣の田畑での米とピーマンの栽培体験

実践校名：豊岡市立資母小学校

学 年：小学3年生

大好き資母！～ピーマンや米の栽培・収穫を通じて、ふるさとのよさを発見しよう～

学習のねらい

- ・ 身近な農作物である米作りやピーマンの収穫体験を通じて農業や食べることへの興味を持たせ、「コウノトリ育むお米」など、地域独自の農業に対する取り組みについて理解する。
- ・ 農作物の栽培に必要な美しい水や土を使った地域の食品を調べ、農作物を大切にする気持ちや地域社会に対する誇りと愛情を育てる。
- ・ 環境保全の大切さを理解させる。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「田畑で働く人々」につながる。
- ・ 5年生の「米作りのさかんな地域」へつなげる。

活動の展開（22 時間）

事前学習（6 時間）

- ・ 川や田んぼの水生昆虫について調べよう。
- ・ コウノトリと米作りの関係を調べよう。
- ・ 学校の周りでどのような農産物が作られているか調べよう。



ピーマンの苗植え（6月）

体験活動（10 時間）

- ・ 田植えをしてみよう。
- ・ 農家さんに米作りやピーマン作りのための工夫や努力を教えてください。
- ・ 米やピーマン収穫作業を体験し、収穫された米がどのように食卓まで上がるか学ぼう。
- ・ 自分たちで育てた米やピーマンを食べてみよう。
(収穫祭・・・いのちのつながりに感謝していただく。)



ピーマンの収穫（9月）

※ 活動場所：学校周辺にある地域協力者の田んぼ



田植えの様子（5月）

事後学習（6 時間）

- ・ コウノトリと人がいっしょにくらすための方法を考えよう。
(調べたことや考えたことを劇にして発表)
- ・ お世話になった農家さんへお礼の手紙を送ろう。
- ・ 資母の美しい水や米を使っておいしい豆腐作りをしている豆腐工場へ見学に行こう。



収穫祭の様子（11月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 米作りに際して、地域の農家の方にご協力いただけるよう、事前に依頼しておいた。

- ・ 米作り農家に、地域における農業の特色や米作りのポイントなどを教えていただいた。
- ・ 収穫した米をPTAや地域の方々と協力し、東日本大震災で被災した岩手県の小学校に送る活動を行った。
- ・ 地域特産のピーマンの一人一鉢栽培を行った。
- ・ 脱穀機など、昔地域で農作業で使われていた道具を見せてもらい、今と昔の農作業の違いを学んだ。

【配慮事項】

- ・ 田植えや収穫作業の際には、できるだけ多くのPTAの協力を得て、児童に付き添っていただき、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- ・ P T A、地元生産者 → 田植え、収穫作業の補助
- ・ 地元生産者 → 田んぼの提供、作業の指導、講話
- ・ J A たじま → 苗の提供
- ・ 豊岡農業改良普及センター → ピーマン一人一鉢栽培の指導、講話
- ・ 豊岡市但東給食センター → 収穫したピーマンを使った献立の提供

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 米作り体験を通じて、農薬を使用した田んぼと減農薬の学校田を比べ、田に生息する生物の様子に違いがあることや、収穫祭でいただく米のおいしさに気づくことにより、環境保全の大切さを学んだ。
- ・ 一連の作業により、生産や収穫の喜び、食べ物大切さを実感し、米や野菜など様々な食べ物の命をいただいて生きていることを知った。
- ・ 米作りやピーマンの収穫作業の中で、地域の自然や気候を生かした農作物について理解し、ふるさとに対する興味や関心を養った。

【課題】

- ・ 田植えをしてから米が育つまでの過程は、ほとんど生産者任せであったため、児童が「自分たちで育てた」という意識を持たせるためにも、成長途中の段階でできるだけ関わり、米作りの大変さを実感させることが必要であるが、時間の確保が難しい。
- ・ 関係機関、関係者の支援体制が今後も継続して得られるように努力したい。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 米作り等の農作物の栽培から収穫に至る過程を大切に体験活動を工夫する。
- ・ 食育の面を通して、地域の産業である農業への理解を深めるような教育活動につなげていきたい。
- ・ 学校、家庭、地域の連携を密にして、学びの定着を図るとともに、ふるさとを愛する心を育てていきたい。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 「米作りって大変」、「稲刈りが難しかった」などといった農作業に対する苦労を痛感する声とともに「カゲロウなど美しい水の中にしかない生き物がたくさんいるから、資母の川はきれいなんだと思った。いろんな生き物が住むことができるよう、きれいな水を守っていきたい」、「おいしいお米や野菜ができる資母はすごい」といった環境保全への意識の高まりや地域に対する愛着などを表現する声も多く聞かれた。

シーカヤックでの海の観察・ワカメの収穫体験

実践校名：香美町立柴山小学校

学 年：小学3年生

ふるさと柴山の海にふれる活動を通して、ふるさとを紹介しよう

学習のねらい

- ・ 身近な地域の様子に関心を持ち、どんなものがあり、どんな人がいて何をしているかを考えようとしている。
- ・ 身近な地域の特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設の場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物の場所と様子や地域のよいところを理解する。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「はたらく人とわたしたちの暮らし」へつなげる。
- ・ 5年生の「わたしたちの生活と食料生産」へつなげる。

活動の展開（8時間）

事前学習（1時間）

- ・ 学校の周りでどのような水産物がとられているのか調べよう。

体験活動①（2時間）

- ・ シーカヤックで校区の海を観察しよう。
 - ・ 海洋クラブのカヤック漕法・安全指導を受け、五感で海を感じよう。
- 活動場所：柴山湾



体験活動②（2時間）

- ・ ワカメとりを体験しよう。
- ・ 磯観察をしよう。
- ・ 漁師さんにおいしいワカメのとり方を教えてもらおう。
- ・ 海産物を育む豊かな自然、岸辺の様子を観察する。

活動場所：柴山湾



事後学習（3時間）

- ・ いろいろな水産物をとる工夫や時期についてまとめ発表をしよう。
- ・ お世話になった海洋クラブのみなさんや漁師さんへお礼の手紙を送ろう。

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 地域にある自然環境（山陰海岸ジオパーク）を教材化した。
- ・ 地域に広く学習活動の場を設けたり、ふるさとの人材を積極的に活用したりし、地域の実態を生かすようにした。

- ・ 体験したことをまとめ発表し、地域の良さを感じる事後学習をした。

【配慮事項】

- ・ 安全について指導を行うとともにP T Aや地域の方の協力を得て事故防止に努めた。

体験活動の支援体制

- ・ 漁業関係者 → ワカメとり指導・講話
- ・ P T A → 作業補助・巡視
- ・ 海洋クラブ → シーカヤック漕法指導
- ・ 地区公民館 → 県民交流広場の事業とタイアップして指導者・引率者の確保

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 地域の方々などとの交流を通して、他者とのかかわり合いを豊かにしていこうとする気持ちを高める機会にすることができた。
- ・ 五感を通して自然にかかわる時間を持てたことで、自然を愛し守ろうとする豊かな感性を育てる学習の場とすることができた。
- ・ 学習したことを他学年や保護者、他校に発信したいと意欲的に学習内容をまとめ、相手に伝わるよう工夫した発表の機会を持つことができた。



【課題】

- ・ 単なる校外学習で終わりにするのではなく、教育課程上、他の教科の学習内容とのかかわりを明確にして、より一層価値ある活動に位置付けていくことがますます重要である。
- ・ 事前に関係機関、関係者との連絡調整をさらに密にし、年度当初から計画的に取り組むことで、ゆとりある準備と実行を可能にしたい。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 本年度に十分に味わった「柴山の海の楽しさ・美しさ・命の尊さ」を1年間だけの楽しい思い出にするのではなく、今後の学習につなげ、広げていきたい。
- ・ 社会科だけではなく、総合的な学習の時間・道徳・国語への広がりも持たせていきたい。
- ・ 地域の人材バンクを整備し、支援体制の強化と活動内容の充実を図りたい。

近隣の畑での黒大豆の栽培体験

実践校名：篠山市立城北小学校

学 年：小学3年生

特産調べから、地域と黒豆の関係を調べよう！

学習のねらい

- ・ 地域の特産物調べを通して、地域と特産物の関係に興味を持たせ、特産物である黒豆づくりには農家の方のどのような工夫があるのか理解できるようにする。
- ・ 農家の方の苦労や努力を体験することにより、食べ物を大切にする心を育み、地域への愛情と誇りを高める。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「田畑で働く人々」からつながる。
- ・ 4年生の「県の人々の暮らし」の学習へつなげる。

活動の展開（32 時間）

事前学習（8 時間）

- ・ 篠山の特産について調べてみよう。
- ・ 篠山の昔話に登場している特産物にはどんなものがあるのか調べよう。

体験活動（16 時間）

- ・ 種を植えよう。
（芽が出る部分を下にして種を植え、保温シートをかぶせ発芽を促進する。2 週間、朝に水やりする。）
- ・ 苗植えをしよう。
（よく根が張るように、45cm 間隔で畝と平行に植える。）
- ・ 土寄せをしよう。
（倒れにくくするため、豆葉（双葉）が隠れるように土をかぶせ、新しい根を張らす。）
- ・ 農家の方に、黒豆作りの工夫や様子を教えてもらおう。
- ・ 枝豆収穫をしよう。
（茎を切り、切った部分を上にして葉を取る。）
- ・ 葉とりをしよう。
（早く乾燥するように、葉を手作業で取る。）
- ・ 収穫・乾燥させよう。
（収穫し、風通しの良い所に立てかけ、2 週間ほどさらに乾燥させる。）
- ・ 黒豆を食べてみよう。（黒豆クッキング）

※ 活動場所：学校周辺にある地域協力者の畑



種植えの様子（6月）



土寄せの様子（7月）



枝豆収穫の様子（10月）

事後学習（8時間）

- ・ 種を植えてから育つまでの過程や、販売過程、黒豆と地域との関係など学習したことを発表しよう。
- ・ お世話になった方を招いて、発表パーティーを開こう。

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ お世話になっている農家の方に質問に答えてもらう場を設定した。
- ・ 収穫することの喜びを知り、子どもとともに地域の特産品が集まり販売される「味まつり」などの地域振興の新しい祭りや豊作の喜びに感謝する気持ちを高め、次の学習へとつなげた。

【配慮事項】

- ・ 体験活動の際には、できるだけ多くの保護者や職員に参加を呼びかけ、児童に付き添っていただき、事故の防止に努めている。

体験活動の支援体制

- ・ P T A、篠山市農業委員 → P T A：体験作業全般の補助
篠山市農業委員：農作物のお世話、作業の指導、講話
- ・ J A丹波ささやま直営店
「特産館ささやま」 → 黒豆販売の協力

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 篠山市で生産が盛んな黒豆づくりを通して、寒暖の差が激しく霧が発生しやすい篠山の気候や、土に住んでいる根粒菌が黒豆の生育に大きく関わっていることを知り、地域の気候と特産品（黒豆）に対する理解が深まった。
- ・ 年間を通じた体験を行うことにより、黒豆の生長過程を観察することができ、育てる喜び、収穫する喜びや生産者の苦労を体験し、食べ物の大切さを実感することができた。
- ・ 年間の流れを担当者がまとめているので、昨年度の様子を参考に農業委員との打ち合わせをスムーズに行うことができた。

【課題】

- ・ 黒豆の日頃の生育に関しては農業委員さんにお世話になっている。また、夏休みを挟んで収穫するため児童に「いつの間にか大きくなった」という意識があるように感じる。自分たちで育てているという意識を持たせるためにはさらなる時間の確保と指導の工夫が必要である。
- ・ 栽培暦（丹波ささやま農業協同組合発行）にそって作業を行うため、児童が受動的な活動になっている部分がある。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 黒豆づくりを通して学んだことをまとめ、お世話になった方に発表していきたい。
- ・ 黒豆を使ってできること（販売・料理など）について考え、児童が主体性を持った取組を行っていく。

近隣の畑での大豆の栽培体験・味噌づくり体験

実践校名：丹波市立竹田小学校
学 年：小学3年生

発見！大豆のひみつ ～大豆作りを通して自然・命に感謝しよう～

学習のねらい

- ・ 身近な食材である大豆の栽培や収穫・加工を通して、自然や人とふれあい、栽培の苦労や喜びを体験し、食に感謝する心豊かな生き方を育む。
- ・ 自分たちの住んでいる地域の人々の生産として農家の苦労や努力を知ることにより、農作物を大切にすることを育み、地域社会に対する誇りと愛情を育てる。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「田畑ではたらく人びと」からつながる。

活動の展開（23 時間）

事前学習（3 時間）

- ・ 大豆の育て方について教えてもらおう。
J A や地域の方を指導者（ゲストティーチャー）として招く。

体験活動（15 時間）

- ・ 大豆の種まきをしよう。
（畑の準備、マルチはりを行い、種まき、水やりをする。）
- ・ 水やり、草ひき等生長の観察をしよう。
- ・ 大豆の収穫をしよう。（乾燥した大豆を収穫し、干してさらに乾燥させる。）
- ・ 脱穀の体験をしよう。（とうみを使って体験する。）
- ・ 大豆を使って味噌作りをしよう。
（脱穀した大豆を蒸して、味噌に加工する。）

※ 活動場所：学校周近隣の地域協力者の畑

事後学習（5 時間）

- ・ 種まきから味噌作りまでをまとめ、発表しよう。
- ・ お世話になった方へのお礼の会をして感謝の気持ちを伝えよう。



大豆植えの様子（6月）



大豆収穫の様子（12月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 学校近隣の畑をお借りし、大豆の育ちを身近に感じられるようにした。
- ・ J A の方や地域の方に大豆の育て方を教えていただく場や質問に答えていただく場を設け、大豆作りへの興味づけを行った。

【配慮事項】

- ・ 植え付けや収穫作業の際には、できるだけ多くの保護者の協力を得て、児童に付き添っていただき、一緒に活動することを通して事故の防止に努める。

体験活動の支援体制

- ・ 地元生産者 → 畑の提供、作業の指導、講話
- ・ J A丹波ひかみ市島支店 → 大豆の育て方についての講話、種まき・収穫作業の指導
- ・ 保護者 → 種まき・収穫作業の補助



体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 大豆を育てることを通して身近な自然に目を向け、生長を楽しみにする子どもが多くなった。
- ・ 大豆が何に加工されているかを知ることによって食生活の中で大豆を意識するようになった。
- ・ 地元で作られている身近な作物を育て、育てることの苦労や努力を感じることで、また、収穫した大豆を食べることを通して、地産地消を意識することができた。そしてさらに、作物や作ってくださる人へ感謝する気持ちを持つ子どもが増えた。
- ・ 大豆を味噌に加工し、お味噌汁を作ってお家の方や地域の方をもてなすことにより、人を喜ばせることに喜びを感じる体験ができた。



【課題】

- ・ ゲストティーチャーとの日程調整。
- ・ 決められた時間の中での活動のため、天候や作物の生長の様子に合わせて関わる時間をしっかり持てるように、ゆったりとした時間の設定が必要である。
- ・ 気候や土、肥料など何らかの原因により、収穫量に差が見られる場合もある。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 活動は天候に左右されるので、早めの打ち合わせや計画を行い、予備日を設定することで、子どもたちの体験活動の時間を確保していく。
- ・ ゆとりある時間確保のため、今年度の活動計画を見直し来年度の活動に生かすようにする。
- ・ ゲストティーチャーとの連絡を密にし、大豆の状況や育ち具合の情報共有、課題解決に向けて連携をしっかりとれる体制作りを行う。

【参考：体験後の子どもたちの声】

- ・ 「芽が出たよ。」「こんなに大きくなってる。」「色が変わったね。」等生長に対する喜びの声を日々聞くことができた。
- ・ 「大豆の種ってこんなに小さいんだ。」「わあ抜けたよ！」と自然とふれあい、新しい発見を喜ぶ声がたくさん聞かれた。
- ・ 「今日の給食の中に大豆がかくれているね。」「これは大豆からできている食べ物だね。」と自分たちの食の中で大豆を意識する声を聞くことができた。

【参考：地域・支援者の声】

- ・ みんな一生懸命世話をしてくれたおかげで、たくさん収穫することができ大変うれしく思います。一緒に活動することで自分自身も命を大切に育てる気持ちを再確認しました。

アサリ養殖や釣り漁など地域の漁業体験

実践校名：南あわじ市立沼島小学校

学 年：小学3・4年生

海で働く人びとの仕事に触れ、地域の漁業の特色を調べよう！

学習のねらい

- ・ 漁師の仕事に触れ、漁業への興味を持たせ、自分たちが通う学校の周りでは、どのような特色があるのか理解できるようにする。
- ・ 海の仕事に関わる方の苦労や努力を知ることにより、魚介類を大切にする気持ちを育み、地域社会に対する誇りと愛情を育てる。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「くらしをささえるまちではたらく人びと」からつながる。
- ・ 5年生の「わたしたちの食生活と食料生産」へつなげる。

活動の展開（16時間）

事前学習（4時間）

- ・ 地元の漁師さんにインタビューしよう。
- ・ 漁協で働く人にインタビューしよう。

体験活動（10時間）

- ・ ハモ料理の仕方を体験して学ぼう。
- ・ あさり養殖の作業を手伝ってみよう。
- ・ 漁師さんに漁の工夫や努力、苦労を教えてもらおう。
- ・ 網の仕組みを理解し、修繕作業を手伝おう。
- ・ アジやタコなどの1本釣り漁を試みよう。
- ・ 収穫された魚介類がどのような経路で流通しているのか、仲買の人に教えてもらおう。
- ・ 家庭で、沼島で獲れた魚介類の料理に挑戦しよう。

※ 活動場所：沼島島内の漁港など

事後学習（2時間）

- ・ 沼島地区の漁師さんたちが抱えている悩み事はどうすれば解決できるのかみんなで話し合ってみよう。
- ・ お世話になった方々へお礼の手紙を送ろう。



ハモ料理の様子（7月）



網の修繕作業の様子（11月）



養殖あさりの引き上げの様子(12月)

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 漁師さんには、質問に答えてもらう場を別途設けた。
- ・ 魚を獲ることだけでなく、出漁前後の仕事にも注目させるよう、網の修理などの仕事の体験活動を仕組んだ。

【配慮事項】

- ・ 漁業体験や収獲作業の際には、必ず複数体制で臨み、できるだけ多くの方の協力を得て、実施したり、安全性を高めるためライフジャケットの着用を徹底したりした。

体験活動の支援体制

- ・ 地元漁師 → 釣りや網の補修など作業の指導や補助、漁船の説明、講話
- ・ 志満丸水産 → 仲買人の役割についての説明
- ・ 沼島漁業協同組合 → 地域の漁業に関する説明

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 漠然としか理解していなかった沼島地区の漁業に関する特色を、体験やインタビューを通じて、以前より深く理解できるようになった。
- ・ 一連の体験により、児童は海で働く人々の仕事ぶりや苦勞を知り、魚介類の大切さを実感するとともに、働いている人を誇りに思うようになった。



網の仕組みの調査（11月）

【参考：体験前後の児童の気持ちの変化】

| 質問内容 | 事前 | 事後 |
|-------------------------|-----|------|
| 海で働く人の仕事への理解が深まった。 | 20% | 100% |
| 海で働く人々を尊敬するようになった。 | 40% | 90% |
| 沼島で獲れる魚介類への興味がわいた。 | 40% | 100% |
| 魚介類を残さず食べるよう努力するようになった。 | 40% | 90% |

【課題】

- ・ 実際に子どもが漁船に乗って出漁することは、法律の問題上ほとんどできず、陸からの釣りや網の手入れなどで体験活動を済ませた。本格的な漁師の活動を目の前で展開してもらうことは、なかなか難しい。
- ・ 関係者との打ち合わせが十分に行うことができなかった部分がある。長期休業日などを利用し、ゆとりある準備と実行を可能にしたい。
- ・ 関係機関の支援体制が今後も継続して得られるかどうかは課題である。
- ・ 児童が、「なぜ？」を深く追究できず、受け身的な活動となっている部分がある。

課題をふまえた今後の取組

- ・ 漁業体験を通じて何を教えるのか、学校・家庭・地域で更に共通理解を図りたい。
- ・ 子どもが自ら深く追究できるように十分な時間の確保と総合学習とのリンク。
- ・ 沼島以外の地区を見学し、比較することによってさらに深まりを出したい。

【参考：体験後の子供たちの声】

- 沼島にはたくさんの漁の方法があって、それぞれがなかなか大変なのだということが分かった。
- 実際に網をくぐらせてもらって、魚が逃げられない工夫がよく分かった。
- 仲買の人や漁協の人は、漁師さんたちとしっかりつながっているのだということが分かった。

近隣の畑でのキクの栽培体験

実践校名：淡路市立佐野小学校

学 年：小学3年生

花育：花作りを通じて、地域の農業の特色を調べよう。

学習のねらい

- ・ 地域の特産物であるキク作りを体験することで、地域への関心を高め、地域社会に対する誇りと愛情を育てる。
- ・ キク作りを通じて、花卉栽培への関心を高める。「花育」とは、花を育てるとともに子どもたち自身の心も育むことである。
- ・ 花農家の人々の工夫や努力を知ることによって地域の農業への理解を深める。

社会科学習とのかかわり

- ・ 3年生の「田畑で働く人々」からつながる。
- ・ 5年生の「農業～さまざまな土地の暮らし」で、淡路島の気候の特徴や土地環境の学習につなげる。

活動の展開（7時間）

事前学習（2時間）

- ・ 校区の畑やビニールハウスを観察してみよう。
- ・ おうちの方に、佐野で作っている花についてインタビューしてみよう。

体験活動（3時間）

- ・ キクの苗を植え生長の様子を観察しよう。
- ・ 花卉組合の方やキク農家の方に、キク作りの工夫や努力について教えてもらおう。
- ・ 収穫作業を体験し、収穫されたキクがどこへ行くのか調べ、他地域とのつながりを学ぼう。
- ・ なぜ佐野は、キク作りや花作りがさかんなのだろう。

※ 活動場所：校区内のキク栽培畑のビニールハウス

事後学習（2時間）

- ・ 自分たちの育てたキクを全校生にプレゼントしよう。
- ・ お世話になった花卉組合の方や農家の方に手紙を書こう。



キクの苗をさし木する（7月）



キクの収穫（11月）

体験活動のポイント

【工夫している点】

- ・ 水やり、施肥などの普段の世話については、農家の方に任せることになるので、農事ごよみをはじめ世話の仕方や花作りの工夫・苦勞などについて話していただく機会を別途もうけた。

【配慮事項】

- ・ 毎年、花卉組合や農家の方の協力をいただき、子どもたちにとって身近な人たちの働く様子を見せることにより、地域で活躍する人々への感謝の気持ちを育てている。

体験活動の支援体制

- ・ 佐野のキク生産農家 → 畑の提供
- ・ J A 淡路日の出職員 → 作業の指導、キクの苗植え
- ・ 北淡路農業改良普及センター職員 → 収穫活動の補助、講話

体験活動の成果と課題

【成果】

- ・ 自分たちの住む地域では、海と山に囲まれた温暖な気候を生かした独特の農業が行われていることを理解できるようになった。
- ・ 一連の活動を通して、花を育てるとともにやさしい心を育てることにもつながった。
- ・ 地域の畑の花の様子について四季を通じて観察するようになり、花卉農業への関心が高まった。

【課題】

- ・ 普段何気なく地域を歩いていても子どもたちは田畑で何が育っているか見ていないことが多かった。実際に、畑のビニールハウスに入り苗植え、手入れ、収穫を体験することで「自分たちが育てた」という意識が高まり、地域への理解や関心が高まった。地域の他の農産物や花卉（スイートピーやカーネーション、キンセンカ）への関心にもつなげたい。
- ・ 毎年、事前に関係機関、関係者との連絡調整をさらに密にし、計画的にそして系統的に取り組みたい。
- ・ 児童にとっては、楽しい場面の体験になりがちなので、生産者（花卉農家）の方の苦労や工夫にもっと実感を持たせたい。

課題をふまえた今後の取組

- ・ キク作りを通じて何を教えるのか、学校、家庭、地域でさらに共通理解を図っていききたい。
- ・ 佐野地域の花づくりの歴史、功績のある先人について、地域史を調べたり花卉組合の方々からお話を聞くなどして資料を集め、4年生の社会科教材につなげていききたい。職員が地域と連携して地域理解を深め、地域教材を子どもの学習に生かしていききたい。

【参考：子どもたちの作文より】

「菊作り体験：菊の苗植え」（7月19日）

今日、まだ名前のない菊の苗植えに行ってきました。きょうのような研究中の新種の花なので、よく説明を聞いて植えました。日本で三人しか植えていません。わたしがうまくできたと思うところは、苗を同じ間かくで植えることです。びっくりしたことは、ホースの先の所に、軍手を着けて水をやることです。なぜかというと、ホースでそのまま水をやると苗がいたんでしまうから、軍手を着けています。今度はピンチ（摘芯）をして、きれいな花がたくさんさいてほしいです。



普及センターの方のお話



ホースで水やり



全校生にキクをプレゼント

農林水産業体験学習の企画・実施にあたって

農林水産業体験学習においては、農地などのフィールドをはじめ、資材・機材や技術指導者などが重要な要素であり、地域の農林水産業関係者の支援を必要とすることが多くあります。

身近に農林水産業関係者がいる場合は、その方に相談することができますが、相談できる農林水産業関係者がいない場合は、以下の農林水産業関連団体、機関に相談してみてください。

また、兵庫県では、実際に農業等を営んでいて、子どもたちの農林水産業体験を指導することができる方を「『学びの農』インストラクター」として登録しており、このインストラクターに支援を要請することもできます。各市町の教育委員会へインストラクターの名簿を提供していますので、問い合わせしてみてください。

【問い合わせ先】

| | |
|----------------|--------------|
| 兵庫県農政環境部 総合農政課 | 078-362-9193 |
|----------------|--------------|

■ 農業関係

兵庫県農政環境部 楽農生活室 078-362-9198

兵庫県農業協同組合中央会 農政広報部 078-333-5896

■ 森林・林業関係

兵庫県農政環境部 林務課 078-362-3464

兵庫県森林組合連合会 078-341-5082

■ 水産関係

兵庫県農政環境部 水産課 078-362-9230

兵庫県漁業協同組合連合会 指導部 078-940-8013

ひょうご農林水産業体験学習実践事例集

発行 農林水産業副読本作成委員会 平成 25 年 2 月

〔平成 24 年度委員会〕

兵庫県小学校教育研究会社会科部会

| | |
|---------------|--------|
| 神戸市立渦が森小学校 校長 | 飯塚 博 |
| 神戸市立若宮小学校 校長 | 田中 準三 |
| 宝塚市立丸橋小学校 校長 | 小畠 宏明 |
| 加東市立鴨川小学校 校長 | 岡 敏久 |
| 姫路市立城陽小学校 校長 | 今田 保博 |
| 豊岡市立資母小学校 校長 | 戸田 ルミ子 |
| 篠山市立大山小学校 校長 | 西山 逸男 |
| 淡路市立佐野小学校 校長 | 夫婦岩 忠倫 |

兵庫県教育委員会 義務教育課 指導主事

兵庫県農業協同組合中央会 農政広報部長

兵庫県森林組合連合会 専務理事

兵庫県漁業協同組合連合会 組織統括本部長

兵庫県農政環境部 総合農政課長

〔平成 24 年度作業部会〕

兵庫県小学校教育研究会社会科部会

| | |
|----------------|--------|
| 神戸市立若宮小学校 校長 | 田中 準三 |
| 神戸市立若草小学校 教諭 | 橋本 寿 |
| 神戸市立高倉台小学校 教諭 | 岡田 洋一 |
| 宝塚市立宝塚第一小学校 教諭 | 梶田 就久 |
| 三木市立三樹小学校 教諭 | 長谷川 久代 |
| 姫路市立安室東小学校 教諭 | 小島 浩平 |
| 豊岡市立資母小学校 教諭 | 宮崎 裕子 |
| 篠山市立城北小学校 教諭 | 林 達雄 |
| 淡路市立中田小学校 教諭 | 片田 暁美 |

〔事務局〕

兵庫県農政環境部 総合農政課